

# 2017年3月期 経営方針

2016年5月2日  
オリンパス株式会社  
代表取締役社長執行役員  
笹 宏行

(スライド1)

- オリンパスの笹です。
- ご多忙のなか、オリンパス株式会社『2016年3月期決算説明会』にお集まりいただき、誠にありがとうございます。
- 本日は、まず私から、先日発表した5カ年計画である16CSPの初年度となる『2017年3月期の経営方針』についてご説明します。
- その後、財務担当の竹内より、2016年3月期の決算実績、及び2017年3月期の通期業績見通しの詳細について数値面を中心にご説明申し上げます。

## 発表のポイント

### 2016年3月期実績

- 連結実績：営業利益は8期ぶりに1,000億円を超え、当期純利益は過去最高を計上
- ROEは16CSP※経営目標の15%を上回る（2016年3月期実績 約17%）

### 事業環境認識

- 海外経済の成長減速等による先行き不透明感の高まり
- 円高トレンドの継続

### 2017年3月期経営方針・通期業績見通し

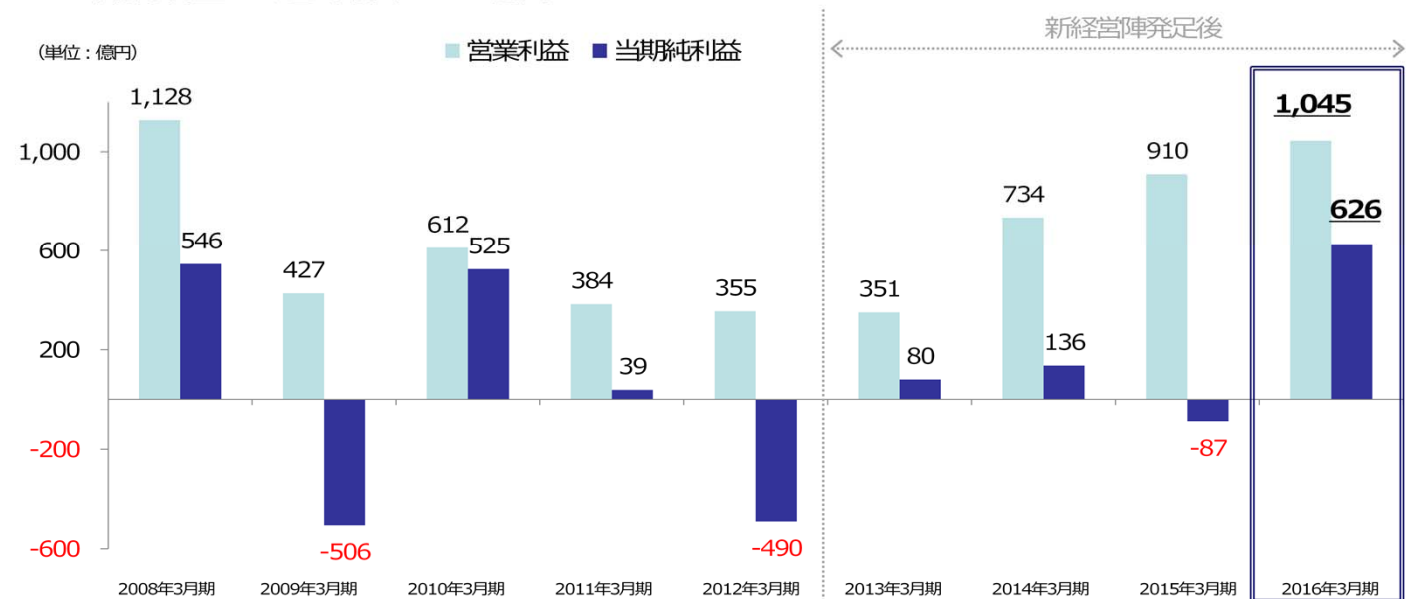
- 16CSP最終年度の目標達成に向けた活動の推進と業務プロセス改革による企業体質の強化
- 円高の影響により、営業利益は減少の見通しだが、実質的利益成長率は16CSPに沿った+7%を見込む
- 当期純利益は、外部環境悪化の影響を吸収し、2期連続で過去最高となる見通し

## (スライド2)

- スライドの2ページをご覧ください。
- こちらは、本日ご説明する内容のポイントです。大きく3点ございます。
- まず1点目ですが、2016年3月期の実績が、利益面を中心に大変好調な結果となったことです。特に、当期純利益は626億円を計上し、計画値も大きく上回り、過去最高の実績となりました。
- また、数値指標においても、16CSPで重要指標と位置付けるROEが、その目標水準である15%を上回り、資本効率性という観点からも、当社が目標とする水準にまで、実績として高めることができました。
- 一方、2つ目ですが、2017年3月期の当社を取り巻く事業環境の変化です。2016年に入り大変厳しさを増し、グローバルに不透明感が高まっていると認識しております。特に、海外向けの売上高が80%を占める当社では、直近の円高進行が業績に影響を与えると見ています。
- 3つ目は、2017年3月期の経営方針、並びに業績見通しです。こうした外部環境の厳しさはあるものの、16CSP最終年度である2021年3月期の経営目標達成に向け、戦略的な活動と業務改革に予定通り取り組んでまいります。
- また、収益面は、円高の影響により営業利益が減少するものの、こうした影響を除いた実質的な利益成長は約7%を維持しております。当期純利益については、過去4年間の経営再建と財務体質改革により、実額として2期連続で過去最高を更新する見通しです。
- 足元では海外経済や為替の状況など不透明さが残っておりますが、外部環境の変化による短期的な業績への影響に左右されることなく、実質的なビジネスの動きをしっかりと捉えたうえで、中長期的な成長戦略を確実に遂行し、事業成長を達成してまいりたいと考えております。なお、為替対応力という点では、今後、地産地消の考えに基づき、各地域の強み、特徴を活かして海外拠点における開発、生産を進めていきます。

## 2016年3月期 連結実績 (営業利益、当期純利益)

- 好調な医療事業が全社業績を牽引し、営業利益は2008年3月期以来、8期ぶりに1,000億円を達成
- 当期純利益※は過去最高の626億円



2016/5/2 No data copy / No data transfer permitted

(※) 親会社株主に帰属する当期純利益 3

### (スライド3)

- それでは、具体的なご説明を、ポイントを絞ってお話させていただきます。
- スライドの3ページをご覧ください。
- こちらは、過去9年間の営業利益と当期純利益の推移をグラフにしたものです。
- 2016年3月期が、2008年3月期以来の大変好調な実績であったことがご確認いただけるかと思えます。
- セグメント別では、好調に推移した医療事業が、過去最高の実績を計上し、また、映像事業においても、収益が改善したことなどにより、連結営業利益が8期ぶりに1,000億円を超える実績となりました。
- 私が経営を担当した、2013年3月期からでは約3倍の営業利益となり、事業ポートフォリオ改革などが、着実に収益拡大に寄与していると見ています。
- また、営業利益が着実に増加した一方で、過去4年間は、不採算事業の整理、証券訴訟の解決、加えて、米国司法省との和解等に優先的に取り組んでまいりました。その結果として、特別損失を計上し、当期純利益は、思うような改善を図ることが、これまで出来ませんでした。
- しかしながら、これらにも一定の目処がついたことに加えて、同時に進めてきた有利子負債の圧縮、業績向上に伴う税効果の改善も加わり、当期純利益をしっかりと確保できる体質に転換することができました。これが、今期の当期純利益の過去最高益計上につながりました。

## 16CSP経営目標：2016年3月期実績および目標水準

- 全ての評価指標が前期比で改善、ROEは16CSP経営目標の15%水準へ到達

	2015年3月期 (実績)	2016年3月期 (実績)	16CSP 経営目標
資本効率性 ROE	△2.6%	17%	15%
事業収益性 営業利益率	12%	13%	15%
事業成長性 EBITDA	1,416億円	+9%成長	期間平均成長率 2桁
健全性 自己資本比率	33%	38%	50%

2016/5/2 No data copy / No data transfer permitted

4

### (スライド4)

- スライドの4ページをご覧ください。
- 続いて、16CSPで経営目標としている数値指標です。
- 2016年3月期においては、4指標全てにおいて、前期比で改善させることが出来ました。
- 特に、16CSPで重要指標と位置付けるROEは、当期純利益が、しっかりと確保できる体質となったことで、前年のマイナス2.6%から17%へ大幅に向上致しました。
- これは16CSPで経営目標とした水準を上回るレベルです。16CSPは高い成長を目指した戦略ですが、今後も適切な健全性を確保した上で、事業収益性、事業成長性をバランスよく向上させ、且つ、資本効率性を維持し、コンスタントにROE 15%レベルを継続するという、高い経営目標を達成してまいりたいと思います。

## 事業環境認識

- ① 2017年3月期 : 新興国等の海外経済の成長減速による先行き不透明感の高まり  
円高トレンド継続
- ② 16CSP期間 : 当社の事業に直接影響する環境認識に大きな変化はない

①

### 2017年3月期における環境認識

- 中国を始めとした新興国経済の成長率鈍化
- 円高トレンドの進行
- 少子高齢化
- 医療ニーズの増大
- 医療費抑制圧力
- 症例数の増加と施設数の減少
- 科学分野の顧客ニーズの多様化
- デジカメ市場の縮小

②

### 16CSP期間における環境認識

## (スライド5)

- スライドの5ページをご覧ください。
- それでは、ここから2017年3月期のご説明をさせていただきます。
- まず、その前提となる事業環境ですが、ご認識の通り、直近のマクロ経済の状況は、中国をはじめとする新興国の経済成長減速等、大変厳しいものがございます。
- 特に、当社においては、直近の円高トレンドが、今期の業績見通しに大きく影響致します。
- 一方で、少し長い視点で16CSP期間である5年間を見ると、少子高齢化の加速、医療ニーズの増大、医療費抑制圧力といった、当社を取り巻くトレンドや事業に影響する外部環境について、大きな変化は無いものと認識しています。
- 従って、中長期における、当社の成長を基本とするポジションに変化はないと見えています。
- 短期的な業績数値の変動はあるものの、5年後の経営目標達成に向けた取り組みを、今期、変化無く、予定通り実行していくことが、経営としては大変重要であると考えております。

16CSPの最終年度（2021年3月期）の目標達成に向けた活動の推進と業務プロセス改革による企業体質の強化

#### ■ 経営資源の最大活用を前提とした、事業拡大、体質強化のための活動の推進

- 生産能力拡大のための工場再開発に伴う製造要員
- 保守体制強化のためのサービス要員
- 品質・製品法規制対応、内部統制、コンプライアンス強化 等

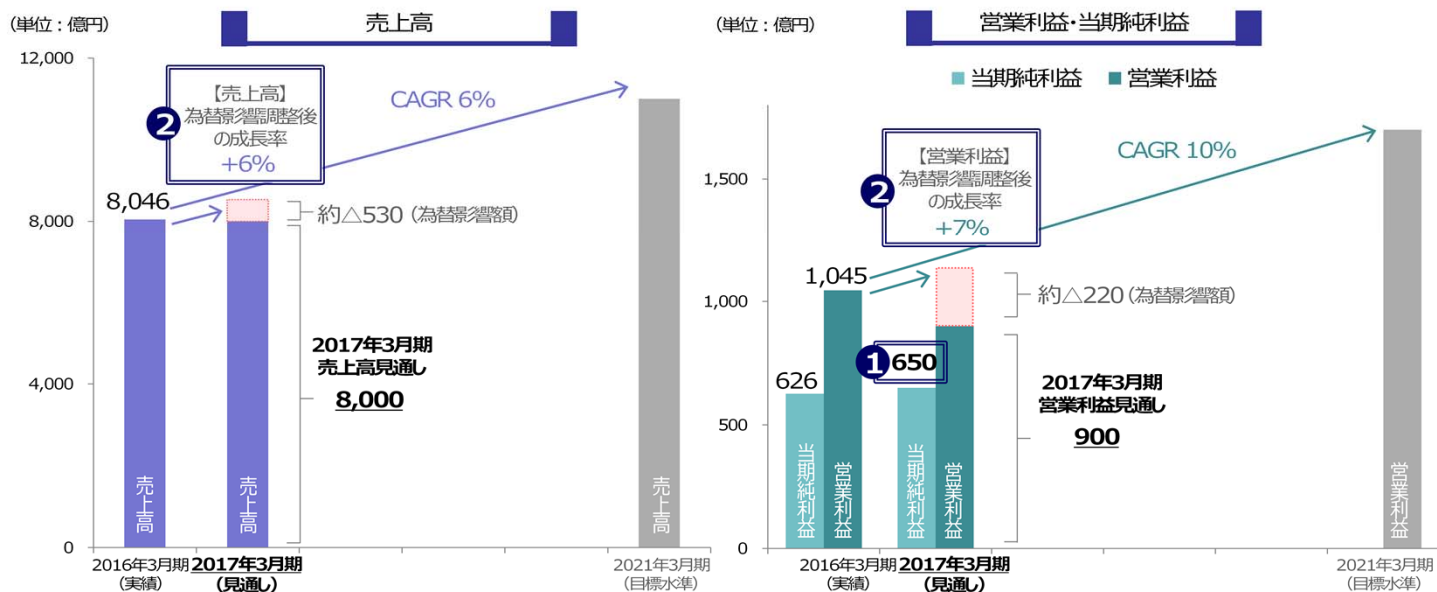
#### ■ グローバルベースでの業務プロセス改革による業務効率化・生産性の向上

### (スライド6)

- スライドの6ページをご覧ください。
- こちらが、2017年3月期の経営方針です。
- 今期は、16CSPのスタートの年であり、今後、当社が持続的な発展を実現していく上で、大変重要な1年と位置づけております。
  
- 16CSP最終年度である2021年3月期の目標達成に向けた活動の推進と、業務プロセス改革による企業体質強化に、予定通り手を打ってまいります。
- 医療を中心とした事業拡大を実現するためには、経営資源の最大活用を前提とする活動を、手を緩めることなく継続して行うことが重要です。例えば、医療事業における生産体制や保守体制の強化に必要な人員の拡大、また、全社的に品質・法規制対応、内部統制、コンプライアンスについても、さらに強化していく必要があります。
  
- 加えて、業務プロセス改革による、企業体質の強化も重要です。16CSPでは、健全性を確保した上で、収益性、成長性のバランスを取りながら資本効率性を高めていきます。その上で必要なことは、当社の事業全体をグローバルに俯瞰して、業務プロセスを抜本的に見直し、事業効率化や生産性向上を追求していくことです。この取り組みは、一朝一夕に結果が出るものではありませんが、今期から明確な目標を設定した上で、具体的な施策を実行してまいります。

## 2017年3月期 業績見通し

- ① 円高の影響により営業利益は前年同期比で減少も、当期純利益は過去最高の650億円（2期連続更新）
- ② 実質（為替影響調整後）前年同期比で増収増益となり、16CSPに沿った進捗となる見込み



2016/5/2 No data copy / No data transfer permitted

7

### (スライド7)

- スライドの7ページをご覧ください。
- こちらは、今期、2017年3月期の業績見通しです。
- 円高の影響により、売上高は減収、営業利益も減益となります。一方、今期の活動を予定通り行なった上で、当期純利益は、2期連続で過去最高を更新し、650億円となる見込みです。
- また、円高の影響を除いた実態としての成長率は、売上高で+6%の増収、営業利益も+7%の増益となります。
- 16CSPは、前半にしっかりと事業拡大施策と体質強化に取り組み、後半に目標達成に向けて収益力を高め、且つ戦略製品の投入を行ない、徐々に利益成長率を高めていく予定です。今期は1年目としての活動を確実に推進し、16CSPで目指す実質的な成長と体質強化を図りたいと思います。

## 2017年3月期 事業別戦略

### 医療

- 消化器内視鏡事業の安定した成長と収益基盤の強化
- 外科事業の売上拡大と収益性向上

#### <BU別主な戦略>

- GIR : 原価低減・販管費効率化による収益性向上
- GS : ディisposable・デバイスビジネスへの取り組み強化と収益性の向上
- UG : 強い商品による着実な売上拡大
- ENT : ディエゴエリートを中心とした内視鏡下副鼻腔手術(ESS)ビジネスの拡大
- MS : 顧客接点強化による最適なサービス提供

### 科学

- 顧客接点強化に向けた戦略の継続的実行

### 映像

- 機軸陣曲との連携強化により、費用を売上規模に見合ったレベルに圧縮

### (スライド8)

- スライドの8ページをご覧ください。
- 最後に、事業別の戦略です。
- いずれも16CSPの戦略に基づき、今期の取組みを予定通り確実に推進します。
- 医療事業においては、ビジネスユニットごとの戦略に基づき、売上の拡大と収益性の向上を図ってまいります。
- 科学事業は、顧客接点強化に向けた戦略への取り組みを、今期も継続的に実行してまいります。
- 一方、映像事業ですが、前期、2016年3月期も約20億円の営業損失を計上し、黒字化できなかったことを経営として大変申し訳なく思っております。2017年3月期は全社的な観点で販売機能や開発機能との連携強化をさらに加速し、保守的な売上見通しをベースとし、事業規模を更に絞り込み、それに見合った水準に費用を確実に圧縮しながら、収益の確保とリスクの低減に取り組めます。
- 今期は、16CSPのスタートの年です。当社を取り巻く環境は、決して予断を許さない、厳しいものがございますが、2021年3月期、最終年度の目標達成に向け、着実な一歩を踏み出したいと考えております。
- 私から今期の方針についての説明は以上です。
- 今後ともご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。ご清聴ありがとうございました。



# 2016年3月期 連結決算概況 2017年3月期 通期見通し

2016年5月2日  
オリンパス株式会社  
取締役副社長執行役員  
CFO  
竹内 康雄

(スライド9)

- 財務担当の竹内です。
- それでは私から2016年3月期の決算概況、および2017年3月期の通期見通しについてご説明申し上げます。

## 2016年3月期実績 連結業績概況

過去最高の収益率

- ① 売上原価率の改善により、営業利益率は過去最高の13%  
 ② 経常利益率、当期純利益率についても過去最高の収益率

(単位：億円)	通期実績 (4-3月)				4Q実績 (1-3月)		
	2015年3月期	2016年3月期	増減額	前期比	2015年3月期	2016年3月期	増減額
売上高	7,647	<b>8,046</b>	+399	+5%	2,147	<b>2,120</b>	△1%
売上原価 (売上原価率)	2,748 (35.9%)	<b>2,693</b> <b>(33.5%)</b> ①	△55 (△2.4pt)	△2%	752 (35.1%)	<b>706</b> <b>(33.3%)</b> ①	△6%
販管費 (販管費率)	3,989 (52.2%)	<b>4,308</b> <b>(53.5%)</b>	+319 (+1.3pt)	+8%	1,105 (51.4%)	<b>1,106</b> <b>(52.2%)</b>	+0%
営業利益 (営業利益率)	910 (11.9%)	<b>1,045</b> <b>(13.0%)</b> ①	+135 (+1.1pt)	+15%	289 (13.5%)	<b>308</b> <b>(14.5%)</b>	+7%
経常利益 (経常利益率)	728 (9.5%)	<b>909</b> <b>(11.3%)</b> ②	+181 (+1.8pt)	+25%	246 (11.5%)	<b>262</b> <b>(12.3%)</b> ②	+7%
当期純利益(※) (当期純利益率)	△87 (-%)	<b>626</b> <b>(7.8%)</b> ②	+713 (-pt)	-	△407 (-%)	<b>197</b> <b>(9.3%)</b> ②	-
EPS (円)	△26	<b>183</b>	+209				
円/USドル	110円	<b>120円</b>	10円 (円安)				
円/Euro	139円	<b>133円</b>	△6円 (円高)				
影響額：売上高	-	<b>+192億円</b>					
影響額：営業利益	-	<b>+113億円</b>					

2016/5/2 No data copy / No data transfer permitted

(※) 親会社株主に帰属する当期純利益 10

### (スライド10)

- スライドの10ページをご覧ください。
- こちらが2016年3月期の連結業績概況です。
- 売上高は前年同期比5%増の8,046億円、営業利益は15%増の1,045億円となりました。
- 営業利益が1,000億円を上回ったのは2008年3月期以降、8期ぶりとなります。
- また、営業利益率は、円安効果に加え、利益率の高い医療事業の比率が高まったこと、さらに全事業分野において原価率を改善したこと等により粗利が改善、販管費の上昇を吸収し、過去最高の13%となりました。
- 当期純利益は有利子負債の圧縮を進めたことによる支払利息の減少や繰延税金資産の加算等による法人税の負担減少等により、前期の△87億円の損失から大きく改善し、金額ベースで626億円、当期純利益率で7.8%と、いずれも過去最高となりました。

## 2016年3月期実績 セグメント別概況

- ① 医療事業：過去最高の売上高、営業利益を計上
- ② 科学事業：事業環境の悪化により減収も、製造原価率改善等、継続的なコスト削減により増益
- ③ 映像事業：構造改革の効果により、損益は大きく改善

(単位：億円)		通期実績 (4-3月)				4Q実績 (1-3月)			
		2015年 3月期	2016年 3月期	増減額	前期比	2015年 3月期	2016年 3月期	増減額	前年同期比
医療	売上高	5,583	① 6,089	+506	+9%	1,602	① 1,637	+35	+2%
	営業利益	1,249	① 1,402	+153	+12%	409	① 416	+7	+2%
科学	売上高	1,039	② 1,016	△23	△2%	311	② 281	△30	△10%
	営業利益	68	② 85	+16	+24%	33	② 29	△3	△11%
映像(※)	売上高	794	③ 783	△12	△1%	188	③ 163	△26	△14%
	営業利益	△117	③ △21	+96	-	△68	③ △22	+46	-
その他(※) (新事業)	売上高	230	158	△72	△32%	45	40	△5	△12%
	営業利益	△10	△58	△48	-	△6	△10	△4	-
全社・消去	売上高	-	-	-	-	-	-	-	-
	営業利益	△281	△364	△83	-	△79	△106	△27	-
連結合計	売上高	7,647	8,046	+399	+5%	2,147	2,120	△26	△1%
	営業利益	910	1,045	+135	+15%	289	308	+19	+7%

2016/5/2 No data copy / No data transfer permitted

(※) 従来「映像」に含めていた新規事業を「その他」へ区分変更したため、2015年3月期の数字を修正しています 11

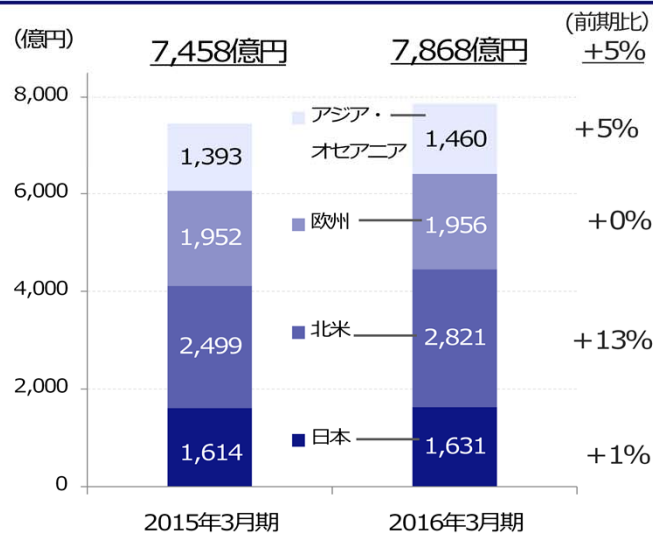
### (スライド11)

- スライドの11ページをご覧ください。
- 続いてセグメント別の業績です。
- 医療事業は主力の消化器内視鏡分野をはじめとして、外科分野、処置具分野も好調に推移し、売上高は前期比9%増の6,089億円、営業利益は12%増の1,402億円と、過去最高の売上高、営業利益を計上、全社業績を牽引しました。
- 科学事業については、産業分野が、下期以降のマクロ環境悪化の影響で、前期比減収となったものの、生産販売計画の適正化を進めたことで、製造原価率が改善し、営業利益は前期比24%増の85億円となりました。
- 映像事業については、この第4四半期で、利益率の高い高価格帯カメラの販売が、売上未達となったこと等から、目標としたブレークイーブンには到達できませんでした。しかし、前期比での損益は約100億円の大幅な改善を達成することができ、これまで取り組んできた原価、販管費の削減等の構造改革の成果が着実に表れていると考えております。

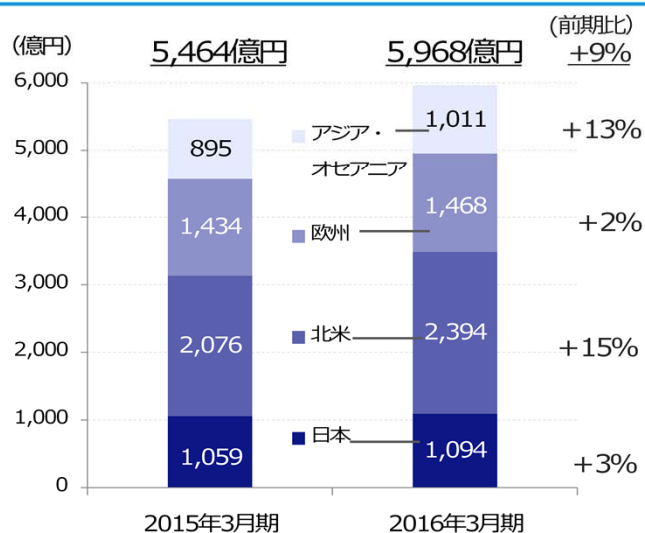
## 2016年3月期実績 地域別売上高

- 連結 : 好調な医療事業が全社業績を牽引し、全地域でプラス成長
- 医療 : 海外ビジネスが好調に推移し、全地域で増収

連結 (4-3月)



医療 (4-3月)



2016/5/2 No data copy / No data transfer permitted

12

### (スライド12)

- スライドの12ページをご覧ください。
- 地域別の売上高です。
- 連結では、好調な医療事業が全社業績を牽引し、全地域でプラス成長となりました。
- 右側のグラフは医療事業ですが、こちらも全地域で増収です。
- 特に、北米は、主力の消化器内視鏡、外科内視鏡が堅調に推移したことに加え、販売体制強化に取り組んできた処置具分野や、エネルギーデバイスの「サンダービート」の販売が好調に推移したこと等により、前期比+15%の大幅な増収となりました。
- アジア・オセアニアについても、中国等の新興国の経済減速により成長鈍化が懸念されましたが、エネルギーデバイスや処置具等のディスプレイ製品の販売が拡大し、前期比で+13%増の2桁成長を確保しました。

## 連結貸借対照表 (2016年3月末)

- ① 有利子負債を約330億円圧縮、自己資本比率は38.2%
- ② デジカメ在庫の削減は予定通りに進捗し、93億円減の144億円

(単位：億円)	2015年 3月末	2016年 3月末	増減額		2015年 3月末	2016年 3月末	増減額
流動資産 (デジカメ在庫)	5,775 (237)	<b>5,207 (144)</b>	△568 (△93)	流動負債	3,748	<b>2,666</b>	△1,082
有形固定資産	1,501	<b>1,661</b>	+159	固定負債 (内：社債・長期借入金)	3,495 (2,533)	<b>3,497 (2,645)</b>	+2 (+112)
無形固定資産	1,806	<b>1,508</b>	△299	純資産	3,573	<b>3,843</b>	+270
投資その他資産	1,732	<b>1,631</b>	△102	(自己資本比率)	(32.9%)	<b>(38.2%)</b>	(5.3pt)
資産合計	10,816	<b>10,006</b>	△809	負債 純資産 合計	10,816	<b>10,006</b>	△809

① 有利子負債： 3,211億円 (2015年3月末比 △333億円)  
 純有利子負債： 1,546億円 (2015年3月末比 +100億円)

(スライド13)

- スライドの13ページをご覧ください。
- バランスシートの状況です。
- 有利子負債は期日弁済等により、2015年3月末比で約330億円減の3,211億円となりました。また、過去最高の当期純利益を計上したことにより、自己資本比率は2015年3月末比で約5ポイント改善し、38.2%となりました。
- デジタルカメラの在庫ですが、生産面のコントロールや、ミラーレスカメラの販売が、ほぼ予定通りに推移したこと等から、2015年3月末から93億円減少の144億円、回転月数では、適正レベルである2.5ヶ月となりました。
- また、有形固定資産が2015年3月末比で159億円増加していますが、これは医療事業の主力製造拠点である白河、会津、青森の3工場の生産能力増強等によるものです。
- 尚、これら3工場は既に竣工しており、白河は2015年10月稼動開始、会津は2016年5月、青森は2016年9月にそれぞれ本格稼動開始の見込みです。

## 連結キャッシュフロー計算書（2015年4月～2016年3月）

① FCFのマイナスは米国司法省との和解を受け、罰金及び制裁金（約725億円）の支払いを行ったことが主要因

(単位：億円)	2015年3月期	2016年3月期	増減
売上高	7,647	<b>8,046</b>	+399
営業利益	910	<b>1,045</b>	+135
(営業利益率)	11.9%	<b>13.0%</b>	+1.1pt
営業CF	668	<b>486</b>	△182
投資CF	△ 396	△ <b>529</b>	△133
財務CF	△ 702	△ <b>339</b>	+363
キャッシュフロー	△ 430	△ <b>381</b>	+48
フリーキャッシュフロー	272	△ <b>43</b>	△315
現金及び現金同等物期末残高	2,098	<b>1,663</b>	△435
減価償却費	412	<b>399</b>	△13
のれん償却額	94	<b>99</b>	+4
設備投資額	477	<b>644</b>	+167

2016/5/2 No data copy / No data transfer permitted

14

(スライド14)

- スライドの14ページをご覧ください。
- キャッシュフローの状況です。
- 引き続き、好調な医療事業を中心に営業活動から潤沢なキャッシュフローが創出されています。但し、2016年3月期につきましては、米国司法省との和解を受け、約725億円の罰金および制裁金の支払いがあり、営業キャッシュフローとしては前期比182億円減の486億円となりました。
- 投資キャッシュフローは、先ほどご説明した医療事業の主力製造拠点の設備投資等で、前期比で約130億円支出が増加したことにより、529億円のマイナスとなりました。
- 以上によりフリーキャッシュフローは、43億円のマイナスとなりましたが、ご説明したように、この中には、米国司法省に対する支出が含まれております。それら一時的要因を除きますと約700億円レベルのフリーキャッシュフロー創出力を確保しております。

---

# 2017年3月期 通期業績見通し

(スライド15)

- それでは、通期業績見通しについてご説明申し上げます。

## 2017年3月期 通期業績見通し

- 円高の影響により、売上高は8,000億円、営業利益は900億円の見通し
- 16CSP最終年度の目標達成に向けた投資の継続
- 営業外収支および特別損益の改善により、当期純利益は過去最高の650億円

(単位: 億円)	2016年3月期 (実績)	2017年3月期 (見通し)	増減額	前期比	為替影響調整後
売上高	8,046	<b>8,000</b>	△46	△1%	<b>+6%</b>
売上原価 (売上原価率)	2,693 (33.5%)	<b>2,690</b> <b>(33.6%)</b>	△3 (+0.1pt)	△0%	-
販管費 (販管費率)	4,308 (53.5%)	<b>4,410</b> <b>(55.1%)</b>	+102 (+1.6pt)	+2%	-
営業利益 (営業利益率)	1,045 (13.0%)	<b>900</b> <b>(11.3%)</b>	△145 (△1.7pt)	△14%	<b>+7%</b>
経常利益 (経常利益率)	909 (11.3%)	<b>800</b> <b>(10.0%)</b>	△109 (△1.3pt)	△12%	
当期純利益(※) (当期純利益率)	626 (7.8%)	<b>650</b> <b>(8.1%)</b>	+24 (+0.3pt)	+4%	
EPS (円)	183	190	+7	+4%	
円/USD	120円	108円	△12円 (円高)		
円/Euro	133円	120円	△13円 (円高)		

2016/5/2 No data copy / No data transfer permitted

(※) 親会社株主に帰属する当期純利益 16

### (スライド16)

- スライドの16ページをご覧ください。
- こちらは2017年3月期の業績見通しです。
- まず、業績見通しの前提となる想定為替レートですが、直近の為替相場の動向を検討した結果、1ドル108円、1ユーロ120円と致しました。
- これにともなう為替影響額は売上高で約530億円のマイナス、営業利益では約220億円のマイナスとなり、売上高は前期並みの8,000億円、営業利益は前期比14%減の900億円となる見通しです。
- このように厳しい見通しとなりますが、為替影響を除いた実質ベースでは、売上高は+6%増、営業利益は+7%増と、医療を中心に実体の事業は堅調に推移する見込みです。
- 当期純利益については、営業外収支や特別損益の改善により、円高による営業利益の減少を吸収し、650億円と過去最高を更新する見通しです。
- また、EPS、1株当たりの当期純利益についても前期比4%増加の190円を見込んでおります。



## 2017年3月期 セグメント別業績見通し

- ① 医療事業：円高の影響により減益も、引き続き全社業績を牽引。実質ベースでは、16CSPに沿った成長率
- ② 映像事業：販管費を売上規模に見合ったレベルに圧縮し、ブレークイーブンとなる見込み

(単位：億円)		2016年3月期 (実績)	2017年3月期 (見通し)	前期比 増減額	前期比 (%)	為替影響調整 成長率
医療	売上高	6,089	<b>6,100</b>	+11	+0%	+7%
	営業利益	1,402	<b>1,270</b>	△132	△9%	+5%
科学	売上高	1,016	<b>1,000</b>	△16	△2%	+5%
	営業利益	85	<b>60</b>	△25	△29%	+7%
映像	売上高	783	<b>700</b>	△83	△11%	△6%
	営業利益	△21	<b>0</b>	+21	-%	-%
その他 (新事業)	売上高	158	<b>200</b>	+42	+27%	+29%
	営業利益	△58	<b>△60</b>	+2	-%	-%
全社・消去	売上高	-	-	-	-	-
	営業利益	△364	<b>△370</b>	△6	-%	-%
合計	売上高	8,046	<b>8,000</b>	△46	△1%	+6%
	営業利益	1,045	<b>900</b>	△145	△14%	+7%

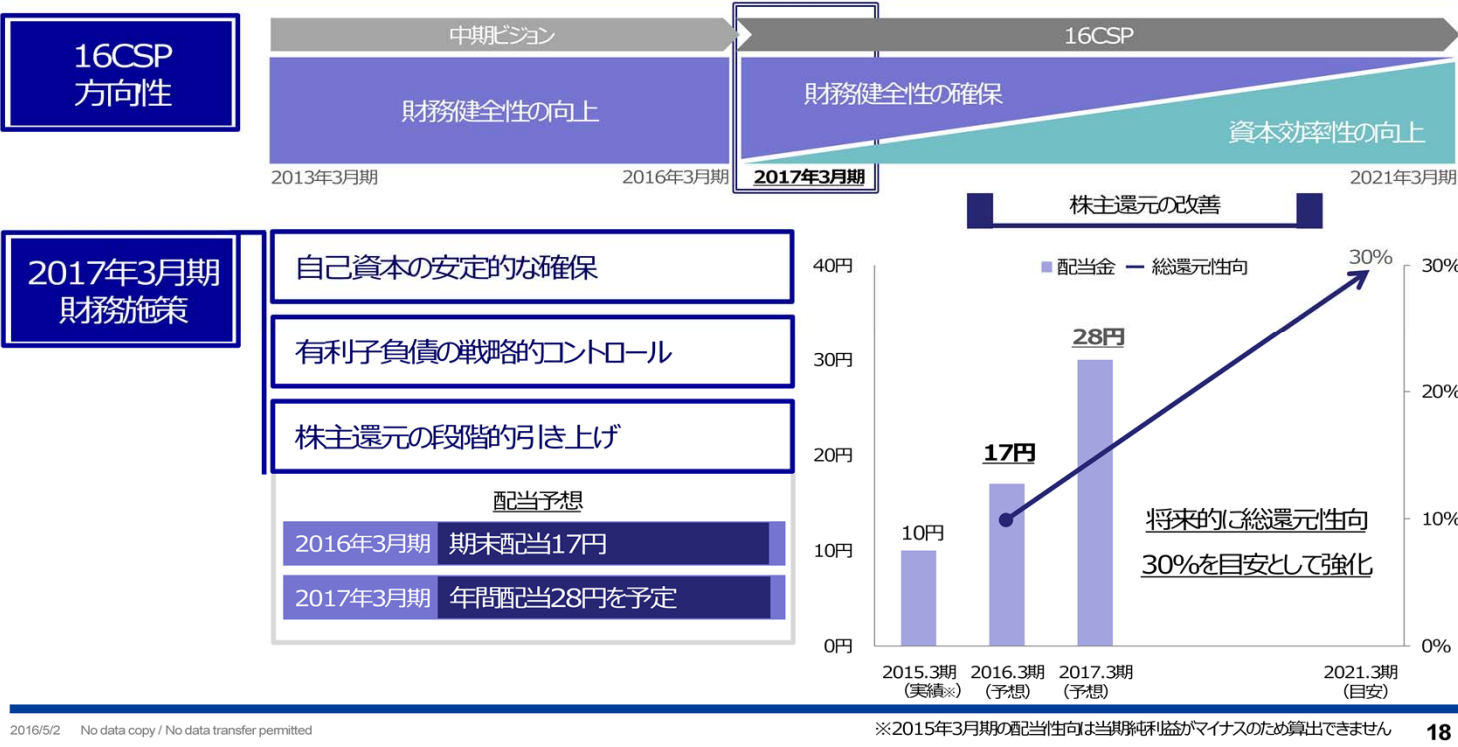
2016/5/2 No data copy / No data transfer permitted

17

(スライド17)

- スライドの17ページをご覧ください。
- セグメント別の見通しです。
- 医療事業は円高の影響により減益の見込みですが、引き続き全社業績を牽引する見通しです。為替影響を考慮した実質ベースでは、ほぼ16CSPに沿った成長率となる見込みです。
- 映像事業については、黒字化を最優先に販売機能や開発機能との連携強化を図り、売上規模に見合った水準に費用を圧縮し、収益を確保する見通しです。

## 2017年3月期 財務施策



(スライド18)

- スライドの18ページをご覧ください。
- 最後に、今年度の財務施策についてご説明させていただきます。
- 3月30日に発表しました、中期経営計画 16CSPでは、キャッシュの配分に関する考え方を明確に定義し、引き続き財務健全性を確保していくとともに、資本効率性の向上を図り、経営目標の達成を目指していく考えです。
- このような中期的な財務戦略の中で、今期はまず財務健全性の確保を重視し、事業利益の内部留保によって自己資本の安定的な確保を図るとともに、有利子負債も戦略的にコントロールし、金融収支を改善してまいります。
- なお、2016年3月期末の配当予想につきましては、17円とさせていただきます。さらに、2017年3月期末につきましては、財務体質の改善や当期純利益の増加を反映し、28円に増配する予定です。
- 引き続き、財務健全性の確保と医療事業を中心とした成長投資を優先した上で、バランスとタイミングを勘案しながら、将来的な総還元性向30%を目安として、株主の皆様のご期待に応えてまいります。
- 私からの説明は以上です。ご清聴ありがとうございました。

---

**OLYMPUS**

---

# 參考資料

## 【参考資料】 2017年3月期 連結業績見通し（上期／下期）

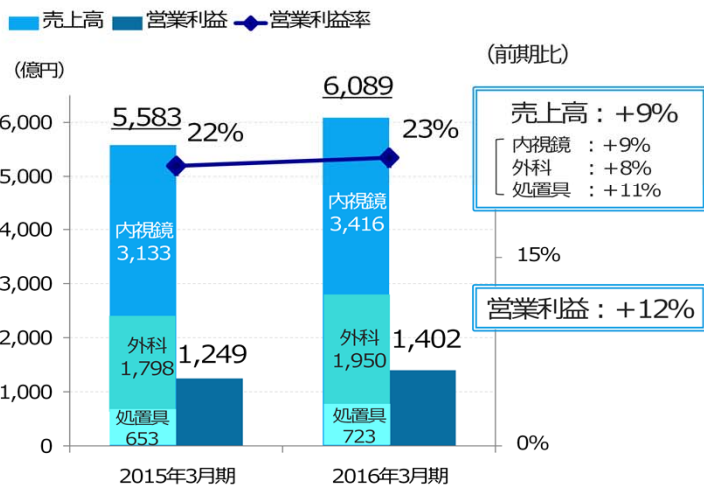
(単位：億円)	2016年3月期（実績）		2017年3月期（見通し）		前年同期比（%）	
	上期	下期	上期	下期	上期	下期
売上高	3,958	4,088	<b>3,800</b>	<b>4,200</b>	△4%	+3%
営業利益 (営業利益率)	501 (12.7%)	544 (13.3%)	<b>370 (9.7%)</b>	<b>530 (12.6%)</b>	△26%	△3%
営業外収支	△ 66	△ 70	△50	△50	-	-
経常利益 (経常利益率)	435 (11.0%)	474 (11.3%)	<b>320 (8.4%)</b>	<b>480 (11.4%)</b>	△26%	+1%
当期純利益 (当期純利益率)	358 (9.0%)	268 (6.6%)	<b>270 (7.1%)</b>	<b>380 (9.1%)</b>	△25%	+42%

## 【参考資料】 2017年3月期 セグメント別業績見通し（上期／下期）

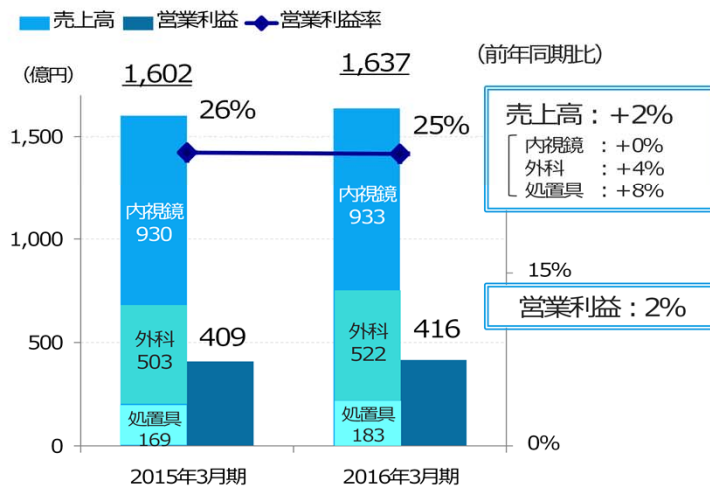
(単位：億円)		2016年3月期 (実績)		2017年3月期 (見通し)		前年同期比 (%)	
		上期	下期	上期	下期	上期	下期
医療	売上高	2,979	3,110	<b>2,920</b>	<b>3,180</b>	△2%	+2%
	営業利益	679	723	<b>590</b>	<b>680</b>	△13%	△6%
科学	売上高	485	531	<b>470</b>	<b>530</b>	△3%	△0%
	営業利益	33	52	<b>10</b>	<b>50</b>	△70%	△3%
映像	売上高	415	368	<b>320</b>	<b>380</b>	△ 23%	+3%
	営業利益	0	△21	△ <b>20</b>	<b>20</b>	-	-
その他 (新事業)	売上高	79	79	<b>90</b>	<b>110</b>	+14%	+40%
	営業利益	△ 33	△ 26	△ <b>30</b>	△ <b>30</b>	-	-
全社・消去	売上高	-	-	-	-	-	-
	営業利益	△ 179	△ 185	△ <b>180</b>	△ <b>190</b>	-	-
連結合計	売上高	3,958	4,088	<b>3,800</b>	<b>4,200</b>	△4%	+3%
	営業利益	501	544	<b>370</b>	<b>530</b>	△26%	△3%

# 【参考資料】 2016年3月期実績 医療事業

通期 (4-3月)

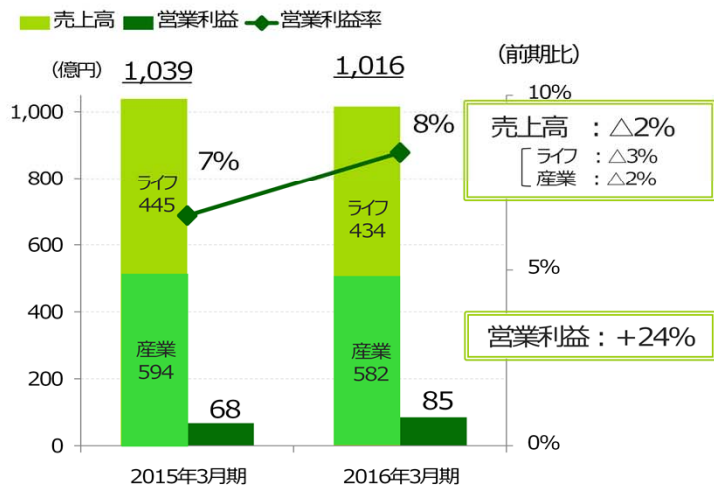


4Q (1-3月)

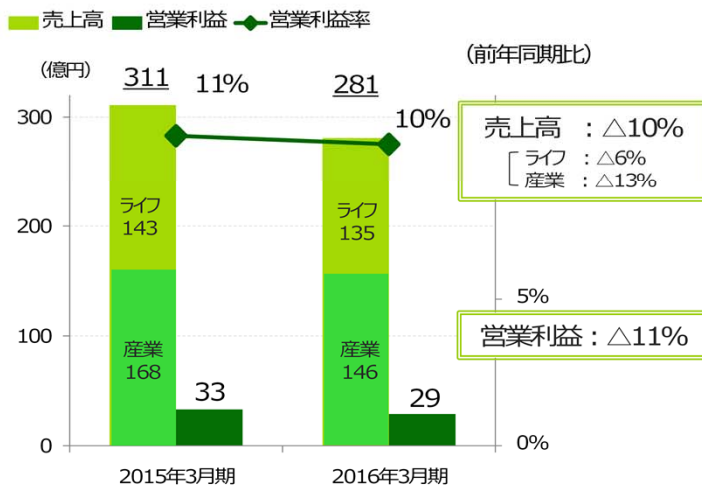


# 【参考資料】 2016年3月期実績 科学事業

## 通期 (4-3月)



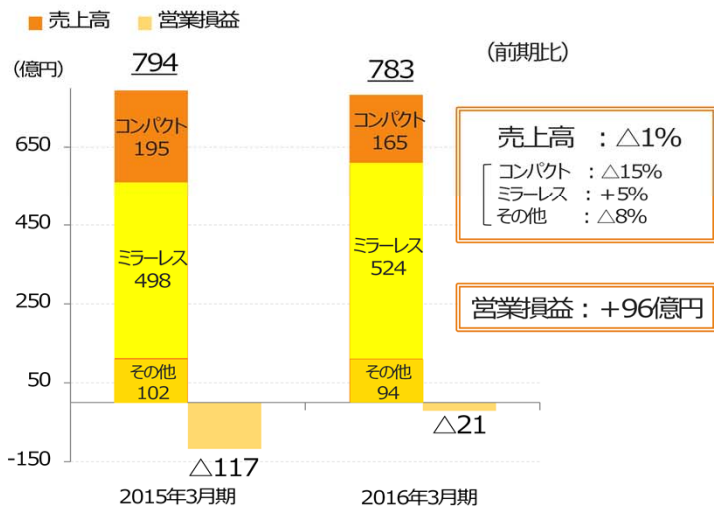
## 4Q (1-3月)



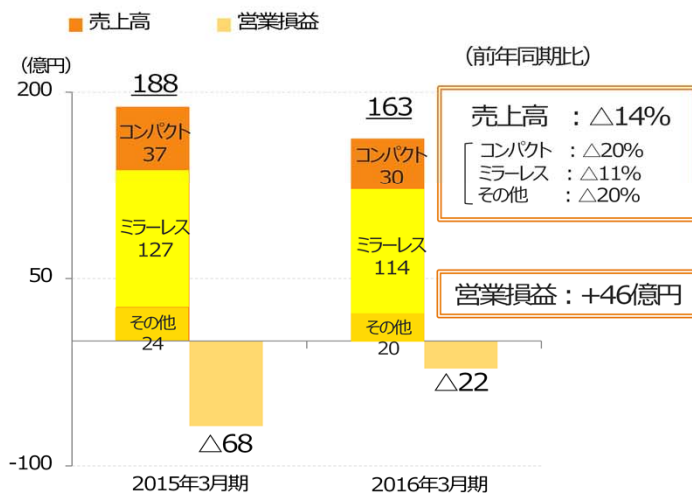


## 【参考資料】 2016年3月期実績 映像事業

### 通期 (4-3月)



### 4Q (1-3月)



# OLYMPUS

- 本資料のうち、業績見通し等は、現在入手可能な情報による判断および仮定に基づいたものであり、判断や仮定に内在する不確実性および今後の事業運営や内外の状況変化等による変動可能性に照らし、実際の業績等が目標と大きく異なる結果となる可能性があります。
- また、これらの情報は、今後予告なしに変更されることがあります。従いまして、本情報及び資料の利用は、他の方法により入手された情報とも照合確認し、利用者の判断によって行って下さいますようお願い致します。
- 本資料利用の結果生じたいかなる損害についても、当社は一切責任を負いません。